令和６年度　古代鏡展示館　夏季スポット展示

古代中国のモンスター

令和６年７月18日（木）
～　９月８日（日）

饕餮（とうてつ）紋鏡（図録№41）

径 9.2 ㎝　重さ 153 g

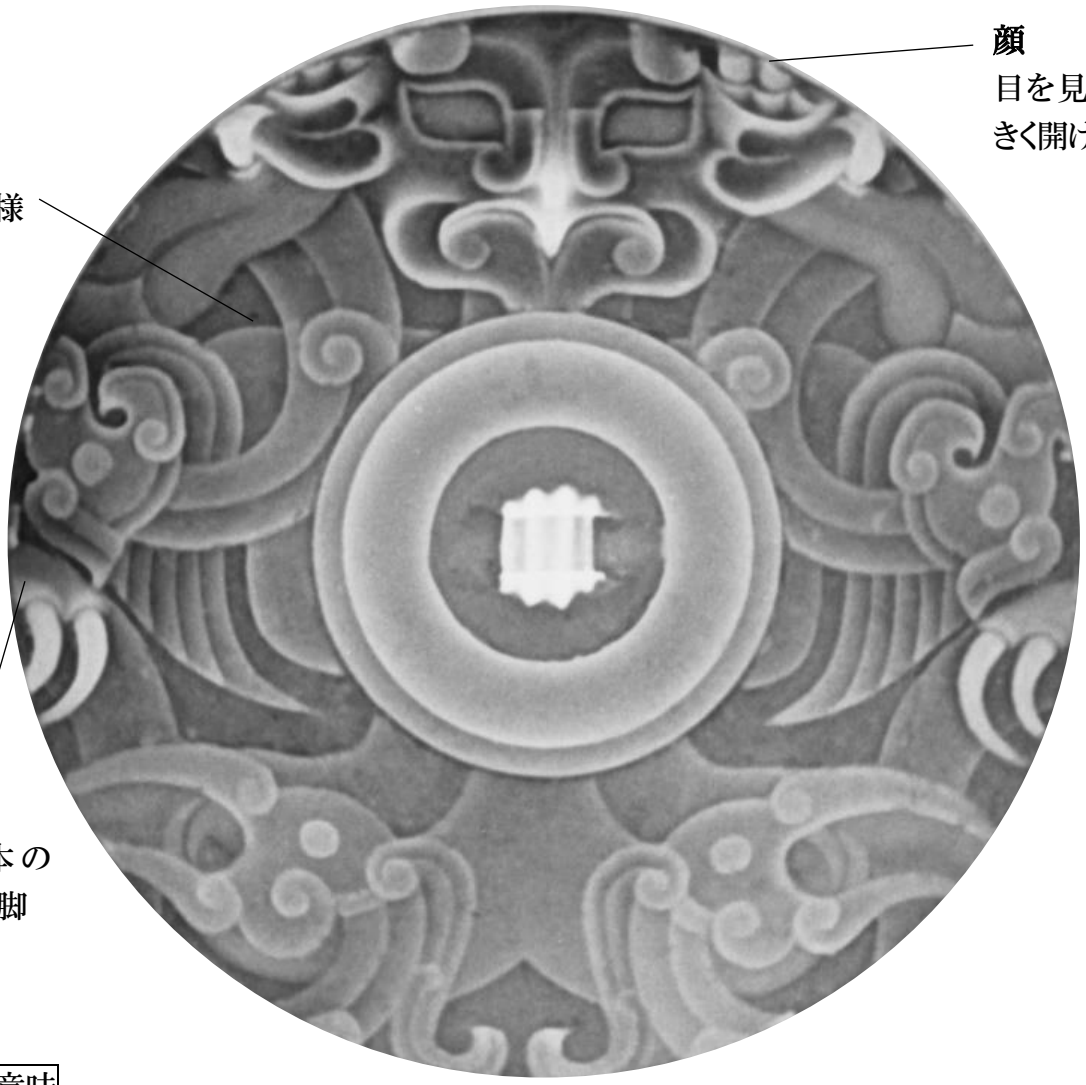
中国の戦国時代（紀元前5～3世紀）、青銅器を用いた祭祀儀礼が衰退する一方で、銅鏡は日用品として需要が高まります。多様な紋様を表した銅鏡が数多く制作される中に、古代中国の伝説に登場する凶悪な怪獣の姿を表した「饕餮紋鏡」があります。
本展では、当館所蔵の銅鏡の中から「饕餮紋鏡」を展示し、紋様のもつ意味などを紹介します。

兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

〒679-0106 兵庫県加西市豊倉町飯森 1282-1
（兵庫県立フラワーセンター内）
TEL　0790－47－2212　/　FAX　0790－47－2213
ＨＰ　https://www.hyogokoukohaku.jp/kodaikyou/

饕餮紋鏡

鏡背面に渦巻いた羽根状のデザインの紋様を施し、その中に獣の顔や鋭い爪をもつ脚などが配されています。獣は大きな目と口が特徴で、青銅器にも表された、想像上の凶悪な怪獣「饕餮」になぞらえています。戦国時代中期（紀元前4世紀頃）に制作されました。



饕餮紋の意味

「饕餮紋」とは

商(殷)周時代の青銅器に表された獣の顔面などを表した紋様を後世の研究者が下記の文献に登場する「饕餮」と解釈し、名付けたものです。

『春秋左氏伝』（歴史書である『春秋』の解釈書）

「貪財為饕、貪食為餮」（財を貪るを饕といい、食を貪るを餮という）

『呂氏春秋』（戦国時代の思想書）

「周鼎著饕餮、有首無身、食人未咽、害及其身。」（周時代の鼎に饕餮が著されている。首はあるが身体はない。人を食べて、まだ呑み込まないうちに、その害がその身に及んでくるほどである。）

商時代の青銅器に表された饕餮（獣面）紋

獣面紋觚（常設展展示中）

紋様の役割

戦国時代の人々がこの紋様を実際に何と呼んでいたのかはわかりません。しかし、饕餮になぞらえられる怪獣の紋様は、大きな目で相手をにらみ、凶悪な形相で相手を威嚇することで、鏡の所有者から魔物を遠ざける、「毒をもって毒を制す」効果が期待されたとも考えられます。